国際シンポジウム

農耕空間の多様性と弥生農耕の形成

2024
3. 17

静岡大学登呂農耕文化研究所

国際シンポジウム　農耕空間の多様性と弥生農耕の形成

日時：2024 年(令和 6) 3 月 17 日（日）9：15〜16：30

場所：登呂博物館１階　登呂交流ホール

主催：静岡大学登呂農耕文化研究所

共催：静岡市立登呂博物館　／　後援：静岡大学（人文社会科学部、人文社会科学部アジア研究センター、サステナビリティセンター)

司会：山形大学学術研究院准教授／静岡大学客員准教授　白石 哲也

9:15〜　趣旨説明：「弥生農耕の多様性と境界のその後」　･･･ 1
静岡大学人文社会科学部教授　篠原 和大

9:30〜　報告①：「近畿地方における凸帯文期の穀物農耕の拡散」　･･･ 3
帝京大学文化財研究所　教授　中山 誠二・大阪市文化財協会　大庭 重信・奈良県橿原考古学研究所　岡田 憲一

10:00〜　報告②：「韓国青銅器時代の農耕技術の多様性と日本弥生時代農耕技術」　･･･ 7
大阪市文化財協会　大庭 重信

10:30〜　報告③：「文京遺跡における縄文時代晩期〜弥生時代前期の農耕空間」　･･･11
愛媛大学埋蔵文化財調査室　特任准教授　三吉 秀充

11:00〜　報告④：「四国東南部における縄文時代晩期から弥生時代の農耕」　･･･15
徳島大学大学院総合科学研究部　教授　中村 豊

11:30〜　報告⑤：「ボーリング調査による水田調査の事例」　･･･19
韓国地質環境研究所　所長　柳 春吉（リュ・チュンギル）

12:15〜　昼休憩

13:10〜　講演：「ジオアーケオロジー的観点からみた韓半島青銅器時代の農耕」　･･･25
高麗大学　助教授　李　僖珍（イ・ヒジン）

14:10〜　報告⑥：「登呂実験田及び静岡平野弥生水田土壌の微細形態」　･･･34
関西大学　非常勤講師　松田 順一郎

14:40〜　報告⑦：「秋津・中西遺跡の土壌分析」　･･･36
株式会社パレオ・ラボ　辻 康男・奈良県橿原考古学研究所　岡田 憲一

15:10〜　休憩

15:20〜　パネルディスカッション：「農耕文化の分析と多様性」
パネラー：李　僖珍（イ・ヒジン）・中山 誠二・大庭 重信・三吉 秀充・中村 豊・松田 順一郎・辻 康男・岡田 憲一・柳 春吉（リュ・チュンギル）
コーディネーター：篠原 和大

16:30　閉会

국제심포지엄 **농경공간의 다양성과 야요이 농경의 형성**

일시: 2024 년 3 월 17 일 (일) 9:15~16:30
장소: 도로박물관 1 층 도로교류홀(登呂博物館 1 階登呂交流ホール)
주최: 시즈오카대학 도로농경문화연구소(静岡大学登呂農耕文化研究所)
공동개최: 시즈오카시립 도로박물관 ／ 후원: 시즈오카대학 (인문사회과학부, 인문사회과학부 아시아연구센터,서스테이너빌리티센터)

사회:야마가타 대학 학술 연구원 준교수/시즈오카 대학 객원 준교수 시로이시 테츠야(白石哲也)

9:15～	취지설명: **야요이 농경의 다양성과 경계의 그 후** 시즈오카대학 인문사회과학부 교수 시노하라 카즈히로	･･･ 1
9:30～	발표①**긴키지방(近畿地方)의 돌대문기 곡물농경의 확산** 데이쿄대학 부설연구소 교수 나카야마 세이지(中山誠二)・오사카시 문화재협회 오바 시게노부(大庭重信)・나라현 가시하라고고학연구소 오카다 켄이치(岡田憲一)	･･･ 3
10:00～	발표②**한국 청동기시대 농경기술의 다양성과 일본 야요이시대 농경기술** 오사카시 문화재협회 오바 시게노부	･･･ 7
10:30～	발표③**분쿄유적(文京遺跡)에서의 조몬시대 만기~야요이시대 전기의 농경공간** 에히메대학 매장문화재조사실 특임준교수 미요시 히데미츠(三吉秀充)	･･･11
11:00～	발표④**시코쿠(四国)동남부의 조몬 시대 만기부터 야요이 시대의 농경** 도쿠시마대학 대학원 종합과학연구부 나카무라 유타카(中村 豊)	･･･15
11:30～	발표⑤**시추조사를 통한 수전 조사의 사례** 한국지질환경연구소 소장 류춘길	･･･19
12:15～	점심시간	
13:10～	강연: **지질고고학적 관점에서 보는 한반도 청동기시대의 농경** 고려대학교 조교수 이희진	･･･25
14:10～	발표⑥**도로실험수전 및 시즈오카평야 야요이 수전의 토양 미세 형태** 간사이대학 시간강사 마츠다 준이치로(松田 順一郎)	･･･34
14:40～	발표⑦**아키쓰,나카니시유적(秋津・中西遺跡)의 토양분석** 주식회사 팔레오・라보 츠지 야스오(辻 康男)・나라현 가시하라고고학연구소 오카다 켄이치 (岡田憲一)	･･･36
15:10～	휴식	
15:20～	패널토론: 「농경문화의 분석과 다양성」 토론자 : 이희진 ・ 나카야마 세이지 ・ 오바 시게노부 ・ 미요시 히데미츠 ・ 나카무라 유타카 ・ 마츠다 준이치로 ・ 츠지 야스오 ・ 오카다 켄이치 ・ 류춘길 코디네이터: 시노하라 카즈히로	
16:30	폐회	

趣旨説明　弥生農耕の多様性と境界のその後

篠原　和大

１　「弥生農耕空間の多様性と境界」

本研究会の発端は 2018 年に開催されたシンポジウム「弥生農耕空間の多様性と境界」（日本考古学協会静岡大会第Ⅱ分科会）である。登呂遺跡の調査を契機として設立された日本考古学協会の大会が静岡で開催されるのは２回目で、40 周年（1988 年）の「日本における稲作農耕の起源と展開」から 30 年を経てその後明らかになった様々な農耕の情報を「農耕空間の多様性」として再検討しようというものであった。

この間、レプリカ法による雑穀などの土器圧痕の検出や各地の水田、畑遺構の検出例の増加などによって、弥生時代の初期の農耕の複合的な内容や本格的な農耕形成についても多様な展開があることが推定できるようになっていた。シンポジウムでは、静岡平野での農耕形成モデルを提示し、弥生開始期の農耕空間の検出状況、近畿地方での大規模水田の事例や各地での水稲耕作と畠作の複合的な農耕事例を報告いただいた。また、大庭重信氏には水田灌漑システムの系統的な分類から東西日本を俯瞰していただく一方、中山誠二氏にはかつての「稲作農耕の波及」の模式を「穀物農耕の波及と定着」の模式図として作り変えて、あらためて列島の農耕起源を考察していただいた。

「弥生農耕の多様性がいかなるものであるか」、それが「時系列的・地域的にどのように展開するか」に関する共通理解と課題を共有することができた。しかしそれらは必ずしも時系列的に別れるものでも地域的に分かれるものでもなく、列島の多様な環境にたいして異なる農耕戦略を持つ集団や地域社会が展開することにより、農耕文化・社会が定着していったと考えられた。

こうした農耕空間の多様性を追究する目的で科研費を申請し、2020 年度基盤研究（B）「日本列島農耕開始・定着期における農耕文化複合の比較考古学的研究」（研究代表者：篠原和大 20H01348）が採択された。同時に「農耕多様性研究会」をスタートしたが、コロナ禍の始まりの年でもあった。

２　農耕空間の分析視角と研究の経緯

本研究では、畑、水田を含む農耕空間の機能的側面に着目して、農耕空間を①作土の土壌学的な特徴と形成過程、②農耕空間の構造とシステム、③土壌・地形・水利等の環境への適応のミクロからメソ、マクロにいたる３つの視角からとらえることを目的とした。このような分析を、同じような関心を持つ研究者が、共通の研究プラットフォームとコンセンサスを形成しながら、各地の多様な環境に成立した弥生農耕に対して行い、農耕空間をその地点性や拡張性、開発志向の大小など性格の異なるものとしてある程度普遍的に類型化できれば、それらの選択や複合によって地域的な環境に適応していった弥生社会の農耕戦略の多様性を説明できると考えた。

はたして、2020 年度当初、具体的な農耕関連遺跡を現地観察し、共同で検討・検証することを軸にした計画は、コロナ禍で全く進まなかった。まずは、参加者がそれぞれのフィールドで分析や実験を進め、Zoom での研究会で報告が次第に行われるようになった。筆者の登呂遺跡を活用する復元・実験的な研究や実験田でのサンプル採取はむしろこの頃進展した。また、中山誠二氏のレプリカ調査の報告をきっかけに、過去の調査の報告や新たにレプリカ調査を実践するメンバーも現れ、現在の新たな成果につながっている。2021 年度から徐々に相互のフィールドの現地調査などが行えるようになった

が、メンバーがそろっての遺跡現地観察は2023年度にいたるまで実現しなかった。

3　農耕空間の多様性

農耕空間の多様性を類型化するモデルとして、まず 静岡平野の登呂モデルを提示した。石鍬を用いる弥生中期前葉までの「丸子モデル」に始まり、弥生石器で木器加工を行う中期中葉から後葉の「有東モデル」と鉄器普及後の生産システムである「登呂モデル」への変遷として捉えられる。このモデルは、静岡平野の扇状地地形の水利環境に適応して水田開発に特化しながら農耕空間を拡大するモデルである。一方、静岡平野の西側に隣接する中遠地域、菊川流域などでは、丘陵部の間に低平な低地が広がり、 弥生中期中葉以降もレプリカ調査で雑穀が検出されるなど、水稲と畠作の複合的な農耕が展開したと考えられる（「菊川モデル」）。日本列島の各地域にはこのように時系列的にも地理的にも連続しながら、やはり環境に適応して異なった多様な類型が存在すると考えられる。今回の各報告はそのような農耕の類型に上記の視点からのいくつかの方法でアプローチしたものである。

中山誠二氏らによる報告①「近畿地方における凸帯文期の穀物農耕の拡散」は、今回行われたレプリカ圧痕分析から近畿地方で秋津・中西遺跡や池島・福万寺遺跡など、前期以降に大規模な灌漑水田が発達する遺跡周辺のその形成期の稲作・ミレット（雑穀）栽培の複合的な様相に迫ったものである。三吉秀充氏による報告③「文京遺跡における縄文時代晩期～弥生時代前期の農耕空間」は同時期の農耕空間に主にミクロ・メソの視点から迫った。中村豊氏による報告④「四国東南部における縄文時代晩期から弥生時代の農耕」は、主に前期に定着した灌漑水田稲作が、環境変化の画期となる前期末・中期初頭以降、畑作物を含めた複合的な様相を強めていくことなどを指摘する。

本研究会では、こうした農耕の多様性の主要な起源を韓半島に求めて調査を行う予定であった。その実施は2023年度に延期され、奇しくもメンバー全員が揃った最初の調査となったが、扶余郡松菊里遺跡の周辺環境調査をはじめとして、南西部及び南東部の主要な農耕関連遺跡の地形環境と立地等を巡見・検討することができた。この日韓の初期の農耕技術の比較については、大庭重信氏が報告②「韓国青銅器時代の農耕技術の多様性と日本弥生時代農耕技術」として、自身の水田構成の分類を駆使しながら畑作を含めた立地環境を検討することでその関係に迫っている。

4　課題としての実験考古学とジオアーケオロジー

分析視角①作土の土壌学的な特徴と形成過程については、登呂遺跡の復元実験田で 復元木器を利用して耕作を行った作土と実際の登呂遺跡水田の作土を土壌の微細形態等で比較する等の方法で遺跡レベルの実験使用痕分析を企図してサンプルの採取を進めている。この方法にはまだ課題も多いが、松田順一郎氏にその微細形態についての速報をいただいた（報告⑥）。また、埋没水田の作土分析の先行研究として辻康男氏・岡田憲一氏に報告⑦「秋津・中西遺跡の土壌分析」をお願いした。

また、訪韓を契機として、今回、直後に行われた松菊里遺跡のボーリング調査の内容を柳春吉氏に報告いただき（報告⑤）、さらに韓国のジオアーケオロジーを第一線で牽引される李僖珍氏に「韓半島青銅器時代の農耕」についてご講演をいただく機会に恵まれることとなった。さらに②構造とシステム、③環境への適応のメソ・マクロの視点にもわたって、最先端の議論が行われることを期待したい。

今回のシンポジウムから日韓の初期農耕文化にコミットするうえでの新たな視点としての「農耕の多様性」の議論がさらに深化し、様々な共同研究が進むことを祈念したい。

【参考文献】

日本考古学協会2018年度静岡大会シンポジウム第Ⅱ分科会2018『境界の考古学』日本考古学協会2018年度静岡大会実行委員会